第３章

実践編

取り組みの実際

実践編：取り組みの実際

【取り組み地区】	【取り組み事業所】
気仙沼モデル事業所	グループホーム　ぽらん気仙沼
北部モデル事業所	グループホーム　ふかふかはうす
北部モデル事業所	グループホーム　歩風楽
東部モデル事業所	グループホーム　あさみず
仙台モデル事業所	グループホーム　ゆうゆう多賀城
南部モデル事業所	グループホーム　もみの木
東部事業所	グループホーム　みんなの家
仙台事業所	グループホーム　なつぎ埜

認知症カフェ　気仙沼モデル　実施報告書「グループホーム　ポラン」

（１）事業所の概要および地域の特徴

運 営 母 体：特定非営利活動法人なごみ

法 人 概 要：平成１７年３月１５日に認知症高齢者グループホームぽらんを開所、現在は気仙沼市内ではグループホームを３事業所とデイサービスを２事業所、居宅介護支援事業所を１か所、他に岩手県一関市でも各種事業を運営している。

（グループホームぽらんについては社会福祉法人千香会を設立、運営主体を移行している。）

地域の特徴：　気仙沼市は宮城県の北東端に位置し、気仙沼湾は典型的なリアス式海岸で三陸復興国立公園に指定されている。

三陸沖の好漁場に恵まれ、生鮮カツオの水揚げ量は１８年連続で日本一を達成するとともに、サンマなどの沖合漁業の水揚げ港でもある。フカヒレの生産でも知られており、様々な魚介類が一年を通し水揚げされることから、漁業・商業中心地でもある。

２）オレンジカフェの取り組み

①カフェの準備

・民生委員や自治会長、地区ボランティア、地区社協などにオレンジカフェの趣旨説明を対面で丁寧に行ない、周知と了承を得ることで協力体制を構築することに努めた。

手書きの看板

②チラシの作成

・デザインには注力した。一目見てカフェに来たくなるものにするため、配色・コピー、字体などすべてに担当者が細心の注意を払っている。

カラーＡ４版のほかに手渡しやすいポストカードサイズのものも作成している。

③場所

・県、市、グループホームで綿密に打ち合わせをし、場所の設定から一緒に行なった。

・今回のカフェは会場をホームではなく、車で５分ほどの古い商店街の中にあるコミュニティセンターを借りて行ない、対象者も基本的に歩いて来られる方に設定した。あえて範囲を広げず地域住民を大切にし、その範囲での声掛けとした。

３）広報

・認知症の方が利用する気仙沼市内の医療機関の医師や相談員、市から気仙沼市内の居宅介護支援事業所のケアマネジャー、開催する居住地区の自治会長や民生委員、地区社協、ボランティアグループの方々へチラシを配布して開催を告知した。

・不特定多数の方々へ向けて宣伝し集客するのは難しいため、居宅のケアマネジャーから直接お客様へ声掛けしていただくことで、より多くの方々にいらしていただくことができた。

・開催する居住地区を重点的に告知したことにより、婦人部や民生委員が多くいらしてくださった。

・不特定多数の参加者とならないために、あえて広報や新聞には載せないこととした。
・後半、地元紙で取り上げていただいたことにより参加者が多くなりすぎて、望まれるようなお話ができなかった方が出てしまった。

テーブルの装飾

４）運営
・手書きの看板や高級感のある食器、テーブル装飾などで「カフェ」のイメージを表現した。
・提供するお茶菓子は毎回目新しい東北６県のものを選び、再度来てくださる方にも新鮮な感覚と楽しみを持っていただけるよう工夫した。
・環境（雰囲気、セッティング）を落ち着いた装飾と統一されたトーンにすることで、オレンジカフェという空間・雰囲気の醸成を第一に心掛けた。
・上記の雰囲気を気に入られ、リピーターとして訪れてくださる方もいた。
・参加人数が多い回は、スタッフや参加者の配席によっては、まんべんなく話を聞くことが難しく、スタッフのホスピタリティ力が求められた。
・馴染みの場所へ通う感覚を持っていただくために、毎回同じ配置や装飾に統一するよう写真に残して前回と同じ環境を再現する工夫をした。
・ランチョンマットを用意することで個人のスペースを確保し、受け入れられているという安心感を持っていただけるようにした。
・来た時点で料金を徴収することにより、お金の心配をせずに話に集中できるよう配慮した。
・おかわりは自由とした。スタッフに声をかけていただくことにはしていたが、話に夢中であったり、遠慮していることも考えられるので、時間をみてスタッフがおかわりを注いでまわった。

５）行政との連携
・県・市ともに非常に協力的で、毎回同じ方（職員）が出席され、法人・参加者とラポールを結ばれていた。支援体制にはとても恵まれた。

一回目はアイスブレイクとして認知症予防体操を行いました

６）運営推進会議との連携
・会議で毎回告知と報告を行ない、ホームの新しい取り組みについて出席者は興味深く耳を傾けていらした。

７）地域との連携
・事前に自治会長と情報交換などをしていたため、地区での行事に認知症サポーター養成講座開催の依頼をいただき、そこで認知症についてやオレンジカフェについて知っていただくことができた。その時サポーターになられた方が、次回からカフェに参加してくださった。

・開催時期を検討する際、運動会や稲刈り、年末年始を避ける等、地域の特性を大事にした。

８）カフェでの認知症の人の役割

・その方を特別扱いするわけでもなく、一般参加者と同じようにお話を（フラットに）傾聴することができたのが、何よりの収穫だったと考えている。

９）オレンジカフェ開催の効果

・普段なかなか接することのない一般の方々とある程度の長時間、介護や認知症について忌憚なく意見交換できたことは、法人・ホーム、そして出席者双方にとって新鮮な体験だった。そしてこれこそがこれからのすべての始まりなのだと思う。

１０）今後の課題

・当法人は本部事務局や居宅事業所を有しているので、ある程度の員数をカフェに配置できたが、現場職員のみの事業所だと相当負担が大きいのではないかと感じている。

おひとりお一人の話を丁寧に傾聴します。

最終日には天気にも恵まれ参加者が多く、とても賑やかに行われました。

１１）考察

このモデル事業のお話をいただいた時、真っ先に思ったのは、面白そうだな、そして、世の中のお役に立てるのではないかな、ということだった。

当法人は事業型ＮＰＯとして、これまでさまざまな新しいことにチャレンジしてきた。

特に震災後は、当法人が地域社会に貢献できることであれば、大きいもの、小さいものに関係なく、常に全力で、情熱を持って取り組んでいる。

この認知症カフェについても、何もないところから始めて、担当職員と一つ一つ丁寧にディスカッションし、チョイスし、一つの形に作り上げた。

できあがってみれば、そして実際に運営してみれば、いつものなごみらしい、ホスピタリティを大切にした、優しいものになったな、と感じている。もちろん、来年度以降、気仙沼市内、あるいは宮城県内のあちこちにできるであろう認知症カフェがこれとは違うものでも、それは一向にかまわないとも思っている。

新しいことに取り組むには、冒険心と好奇心、それに批判や批評を受けとめる小さな勇気が必要だ。それが当法人にはあり、そんな我々へ今回この事業を委託して下さった、宮城県、気仙沼市、そしてＧＨ協議会に心から感謝している。

オレンジカフェ開催記録

運営母体	事業所名	担当責任者
特定非営利活動法人なごみ	グループホームぽらん気仙沼	及川　八千代

開催日時　平成27年　9月30日（水）　午前10：00～12：00
活動場所　気仙沼駅前コミュニティセンター（気仙沼市古町）
運営スタッフ　管理者(　1　)人　介護員(　　)人　その他(　11　)人　計　12 人

参加者	地域の認知症の人	介護家族	地域	専門職	ボランティア	認知症サポーター	その他	計
	0人	2人	6人	10人	1人	0人	5人	24 人

費用　参加者１人(　100　)円

参加費	事業所	その他		
1,200 円	円	円	計	1,200 円

①広報

方法

〇オレンジカフェのチラシを下記の方々に配布し開催告知した。

- 気仙沼市内の医療機関の医師や相談員
- 気仙沼市内の居宅介護支援事業所のケアマネジャー
- 開催する居住地区の自治会長や民生委員、地区社協、ボランティアグループ

効果

- 第一回目としては、居宅のケアマネジャーと民生委員の参加がありオレンジカフェの雰囲気を知っていただけた。アンケートでは“また来たい”との感想もあった。

課題

- 不特定多数の方々へ向けて宣伝し集客するのは難しいが、初回の参加者が次回もいらしていただけるような工夫を考案する。

②環境(雰囲気,セッテイング)

方法

- オレンジカフェという空間・雰囲気の醸成を第一に心掛ける。
- 落ち着いた装飾と統一されたトーン
- 担当スタッフのホスピタリティとサービス

効果

- 会場に限りはあるものの、スタッフのホスピタリティと統一された装飾等により、カフェの空間を演出することができた。

課題

- 参加人数が多くなった場合の、スペースとスタッフの確保。

③プログラム

内容

- 茶話会
- 情報交換、各種相談
- 介護予防体操

効果

- 軽体操がアイスブレイクの役割を果たし、話しやすい雰囲気となった。

課題

- 次回も来たいと思えるようなプログラムやメニューを取り揃えることが必要。

④準備物

- 別紙リスト参照

⑤その他

- オレンジカフェを開催する運営法人によって、人件費の予算が必要ではないか。

認知症カフェ　北部モデル　実施報告書　「グループホームふかふか・はうす」

グループホーム紹介

社会福祉法人　さんりん福祉会
グループホーム　ふかふか・はうす
・平成１２年１月２４日１ユニット開設
・平成１７年２月１ユニット開設
・平成２５年４月　共用型認知症対応型デイサービス開始
・木造平屋建て　２ユニット　１８名
・その他にデイサービス、居宅介護支援事業所

冬のふかふか・はうす（平成 28 年）

ちなみに去年のふかふか・はうす!!

地域の特徴

当グループホームは鳴子温泉の中山平温泉地区という大自然に恵まれた場所に位置しています。名称鳴子峡より山形方面に向かい、車で６、７分です。冬はかなりの雪がふりますが、夏はクーラーなしでも快適に過ごせます。野生の動物もちょくちょく遊びに来てくれます!?（サル、イノシシ、タヌキやキツネ等…）鳴子と言えば温泉♨。日本にある泉質１１種類のうち、９種類があります（川渡温泉、東鳴子温泉、鳴子温泉、鬼首温泉、中山平温泉）の５つの温泉郷、温泉番付で東の横綱と言われています。特産物は鳴子こけし、鳴子漆器、農産物等。

オレンジカフェの取り組み

ふかふか・はうすでは、月に１回 11:00～15:00 まで鳴子温泉駅前の“好日館”という（お土産屋さんとギャラリーが一緒になっている）ところでオレンジカフェ『よっていがいん』を平成 27 年７月から 11 月のまで店舗が休みの第４火曜日に、合計５回開催しました。

鳴子温泉駅前の“好日館”のぼりが目印

１.オレンジカフェ準備
・目的の共有
地域包括支援センター、行政、玉造地区の高齢者施設（グループホーム、少規模多機能、特養）などの職員が集まり、目的や内容等話し合いをした。（好日館にて）『よっていがいん』という形で前年度も実践していたこともあり、取り組みやすかった。

・チラシの作成

地域包括支援センター作成（玉造地区全域用）、ふかふか・はうす作成（鳴子地区用）の２種類を用意。特に鳴子地区用は目立つように、親しみやすく手書きで用意した。又、鳴子総合支所だよりにも毎月掲載した。

・場所

鳴子温泉駅前から徒歩 1 分ほどの好日館というギャラリー＆お土産屋さんで。近くには病院、鳴子総合支所、銀行、郵便局、駅前には足湯もある。駐車場も３０分は無料という駅前駐車場があり、場所的にはとても良かった。ちなみに使用料はお店のご主人のご厚意で無料でした。

２　広報

・地域へのポスティング（民家へのちらし配布）・美容院　・コンビニ　・薬局
・行政窓口　・地域の掲示板　・民生委員集まり時へ配布　・包括支援センター
・病院（チラシは貼れなかった）　・地区の高齢者施設　・駅　・好日館
・喫茶店　・鳴子支所だより（８月号～１２月号まで掲載）　・のぼり（５本作成）

毎回、ふかふか・はうすの入居者であるＡさんが参加し、ご本人が住んでいた地区ということもあり、自ら友人や知人に声をかけてくれた。Ａさんがいるならと、あいに来ていただいた。又お土産を買う観光客に対し、Ａさんは接客もして店の売り上げに貢献。

お土産を買う観光客。壁には大野隆さんの絵

３　運営

・運営費については、参加費お茶代とし１００円いただいている。（貯金箱設置）

・設営（テーブル配置等）

テーブルとイスは、いつも置いているお店のものを使用（学校用の机とイス）テーブルクロスと花を用意。メニュー表などもテーブルごとに置き、湯飲み、コーヒーカップなどもこだわった。

Ａさんはもちろん、当日担当の他の施設職員、包括、鳴子支所などの職員みんなで準備した。時間が１１時から１５時と長かったのでお弁当は隣のお惣菜屋に頼んだり、交代で近所の喫茶店でランチを食べたりと楽しみながら実施した。

４　行政との連携（玉造地域包括支援センター、大崎市市民福祉課、鳴子総合支所）

大崎市では“いつまでも生き生きと認知症になっても安心して暮らせる大崎市”を目指し、認知症地域推進委員としても以前から認知症高齢者の介護家族交流会等で施設間の交流をすすめていた。そこで、地域のかたが「相談の場面」と「ご本人の交流の場面」を求めていることを再認識。「集いの場があるといいな」・・・これって認知症カフェ？ということになり、ネーミングを『よっていがいん』に決定し、２６年度５回開催。場所を施設や総合支所のある保健・福祉総合センターで実践する。そんな経緯もあり、２７年度はどのような形ですすめようかと玉造包括の担当職員と考えていた。そんな時に、グループホーム協議会でオレンジカフェ設置促進・普及啓発事業を実施する事業所を募集するということで、すぐに応募。“認知症カフェ推進チーム”が再発足する。

７月１４日のオレンジカフェ実施事業所説明会の時は大崎市市民福祉課から２名、玉造包括から１名と参加し、情報を共有した。その後、ネットワーク会議と称して７月２１日に好日館にて実施する。参加者は他の事業所（ふかふか・はうす含み５事業所）、大崎市民生部高齢介護課、岩出山市民福祉課、鳴子市民福祉課、合計１４名の参加者であった。又、11 月 12 日に行われた玉造地域包括ケア会議（100 名近く参加）において、「地域の自主的な取り組みの現状と報告」として認知症カフェの取り組みを報告した。

３回目　バイオリンの生演奏。クラシックから懐メロまで。看護学校からの実習生も。

５　運営推進会議との連携

会議ごとに認知症カフェを実施するということをＰＲし、次回の会議では内容報告をした。又、民生委員の定例会で話してみてはどうか？という案をいただき、出向いて内容説明した。その際出席していた民生委員の 1 人はポスターを新たに３０枚ほどコピーして近所に配ったということもあった。

６　地域との連携

ポスターや広報の支所だよりなどの効果で、回数を重ねる度に周知は出来ていったように思う。このようにカフェ運営に理解や興味を示す人たちの参加によって少しずつではあるが広く地域に行き渡るのではないかと思う。

２６年度の反省で施設とかセンターでするのは敷居が高いという反省があり、今回はもっと町に出よう、身近に相談したり、お茶でも飲みながら気楽に過ごせるところというイメージで鳴子温泉駅前を選んだ。病院が近くにあるということで病院受診ついでに寄ってみたという高齢者のご夫婦。地元では相談しにくい・・・との理由で包括を通してこちらに来てみたというご夫婦は、帰りの電車時間までくつろいでいった。来て良かったと話してくれた。ヘルパー仕事をしているという職員は興味本意で来たとのこと。肩が凝っていたので当日当番だった支所の職員に肩を揉んでもらった。また、観光客はお土産を買い、お茶を飲み、雑談をして頑張って下さいねと励ましの言葉を頂いた。それに加えて、好日館のご主人のご厚意はとても嬉しかった。寒かったときは、朝からストーブをつけててくれた。電気や水道も自由に使わせていただいた。今回は１１月で終了したが、「来年はいつするの？決まったら教えて」との言葉は本当に嬉しい。今後も継続した広報と開催を行いたい。

７　認知症の人の役割

今回５回開催したが、すべてに参加してくれたＡさん。自身が住んでいたということもり、楽しみながら準備から当日の飾りつけ（お花は前日にふかふか・はうすの庭から摘み、花瓶も準備）をしてくれた。お茶やお茶菓子のセッティング、テーブルセンターを掛けたり、お出迎え、お茶出し、洗いものなどしていただいている。

８　開催による効果

　GH 入居者のＡさんは月に１度のカフェの日をとても楽しみにしていた。何を着ていこうか、お花は何を飾ろうかとわくわくしていた。

運営推進会議で報告すると、鳴子地区だけでなく中山地区でも出来ればという意見もいただき、民生委員からは、身近な相談場所として進めやすいとの意見もでた。

また、鳴子地区ではふかふか・はうすが中心で開催したが、連動して岩出山地区ではグループホームなんてん岩出山にて２回開催した。このように、玉造地区としては７回開催することが出来た。少しずつではあるが、地域の交流の場として位置づけが出来たように感じる。「本人やその家族が地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解しあう」ということには程遠いが一歩くらいは前進したと思う。大崎市の中でも町カフェとして実施したので、他の地区からの見学もあり相乗効果を期待したいと思う。

９　課題と考察

・鳴子温泉駅前の店舗での実施だが、そこまでも行けない方はどうするのか？
・内容はお茶のみや相談とあるが、何かメインとなる催しが必要ではないか？
・ボランティアをどうするか？（募集、運営、育成等）
・参加者のその後の把握、対応はどうするか？
・来年度も継続して実践していきたいと考えているが（４月～１２月）運営の方法、内容、目指すべきものなど地域のネットワークを確認しながら幅を広げて行きたいと思う。さらに地域の実情を把握し、地域づくりも含め認知症の人と家族、地域と専門職種が相互に情報を共有し、お互いを理解しあう「場づくり」を続けていきたいと思う。

オレンジカフェ開催記録

運営母体	事業所名	担当責任者
さんりん福祉会	ふかふか・はうす	中津留美津江

開催日時　H27年　8月　２５日　11：00～15：00
活動場所　鳴子温泉駅前　好日館
運営スタッフ　管理者(２）人　介護員(３）人　その他(３）人　計　８　人

参加者	地域の認知症の人	介護家族	地域	専門職	ボラン	認知症サポーター	その他
	０　人	２　人	13　人	４　人	０　人	０　人	５　人　24　人

費用　参加者１人　100　）円

参加費	事業所	その他	
100　円	円	2000 円	計　2000 円

①広報

方法

ポスターを地区の掲示板に貼る　鳴子支所、コンビニ、薬局、美容院、駅、他の施設に掲示する　鳴子支所だよりに掲載　民生委員の定例会にて説明を行う

オレンジカフェ『よっていがいん』ののぼりを作る（5本）

効果

のぼりはめだってよかった

民生委員のかたが、チラシを自らコピーし、近所に配ってくれ、当日は５，６人連れてきてくれた

課題

今後も支所だよりには掲載するようにする

②環境(雰囲気,セッテイング）

方法

お茶のメニュー表を作成した　各テーブルごとにおいた

１００円を入れる貯金箱を用意した（ポスト型）

テーブルクロスを掛け、花を飾る

効果

メニュー表は分かりやすくて好きなものを注文できるのでよかった

貯金箱も現金が見えないのでいいかもしれない

課題

バラエティに富んだメニューを用意しなければならない

③プログラム

内容

お茶のみ、相談

効果

相談者から現在、リハビリに通っているが、（独居）今後のことを考えると不安。独居の方が周りにも多い家の中にこもりがちなのでこのように集える場所があれば、今後利用したいという相談があった

課題

席が１５席くらいあるが、今日はたくさんの方が一気にいらしたので席が足らなかった

コーヒーはドリップタイプが人気。もっと用意したほうが良い

④準備物

お茶、コーヒー、ジュース、冷たい飲み物、お茶菓子、

⑤その他

次回はお弁当を持ってもっとゆっくり楽しい時間を過したいとの要望があり、来月の開催を楽しみにしてるとのこと。とてもにぎやかだった

認知症カフェ　北部モデル　実施報告書　「グループホーム歩風楽」

グループホーム紹介
有限会社　ポプラ
　•平成 17 年 5 月 1 日　開所
　•木造平屋建て　　2 ユニット　18 名　　（1ユニット　9 名）

地域の特徴
　グループホーム歩風楽から車で 5 分のところにある小牛田駅は東北本線が南北に走り、石巻線、陸羽東線の始発駅になっており旧小牛田町は昔から鉄道の町として知られています。黄金色の稲穂の間を蒸気機関車が走る姿は鉄道ファンでなくても一見の価値があります。
また、近くに子授けの神様で有名な山の神社があり初詣や桜、藤、紫陽花、紅葉など四季折々を楽しみながら、産すな（うぶすな）通りを散策出来るお出かけコースがあります。
施設の半径 500m 以内に幼稚園から高校まであり、特に西隣の中学校は朝夕の挨拶、吹奏楽の音や運動部のかけ声、入学式、卒業式など学校行事を通して生徒の躍動感が伝わって来ます。南隣には整形外科クリニック、内科クリニックがあり閑静な住宅地でも生活の息吹を感じられる環境にあります。

オレンジカフェの取り組み
　平成 27 年 7 月から 8 月を除き月 1 回不定期日で 12 月まで計 5 回、10:00～12:00 まで開催しました。
1、 カフェの準備
　　•目的の共有
モデルカフェを行なう前から美里町が行なっていた認知症家族の会を隔月で当事業所が行なっていたので、地域包括支援センターと連携しながら進め、準備に携わるスタッフにも目的を説明し協力を得た。
カフェで使用する茶菓子入れ、コップ、テーブルセンター、メニュー表、ウエルカムボードなど物品の購入と保管場所の確保の統一を図り、10:00～の開始時間に合わせ遅くとも 9:00 には、セッティング（テーブル、椅子の設置、花を活ける、茶菓子の準備、飲物準備、ウエルカムボードの設置など）に掛かる必要があった。セッティングのスタッフは毎回、4～5 人で行なった。（管理者、事務員、総務、厨房職員など）
　　•チラシの作成
　　目に留まりやすいような色使いやイラストを入れ、D―LIFE　CAFÉ の意味と開催内容を明記した。
　　•場所
　　同敷地内にある地域交流室（81㎡）を使用したが 2 階にあるため、初めて来所する地域の方は分かりにくく、階段かホームエレベーターを利用するため車椅子の方や高齢者の方は開催場所までの移動時間が掛かった。特に、グループホーム入居者の方は別棟からの移動で天候にも左右された。

2、広報

・事業所掲示板へ貼り出し

・地域包括支援センターより家族の会参加者、介護家族へ郵送

・健康福祉センターに設置

・地域へポストイン

・ご利用者家族へ口頭での案内

ウエルカムボードでお出迎え

上記の案内や声掛けなどを行なったが、地域の方々にとって介護施設は「興味はあるが敷居が高い」というイメージがあり中々浸透せず参加人数にバラつきがあった。
地域のキーパーソンとなっている方（民生委員）の協力は大きく民生委員の声掛けで地域の方の参加に繋がった。
参加人数の平均はセッティング者を除き、グループホームスタッフも入れ約16 名だった。
オレンジカフェについての説明や広報活動は時間を掛けて行ない住民自らの意思で参加して頂けるように広報活動も創意工夫が必要であることが分かった。

3、運営

・運営費として1回の参加費100円を頂き、フルーツや昔懐かしい駄菓子などを用意しテーブルには飲物メニュー表を置き、好みの飲み物を提供した。

テーブルセンターを敷き、季節の花を摘み生花を飾るようにした。生花を飾る事で季節感や花にまつわる回想など話題が広がった。

カラオケ機器で軽音楽を流したり参加者同士で歌ったりと音楽は雰囲気づくりに欠かせなかった。

庭に咲いていた花を活けました

4、 行政との連携（地域包括支援センター）

・当町の地域包括支援センターは行政機関の一つであり運営推進会議への参加や町内介護事業所間で MSC－NET（美里スマイルケアネット）という会を通して月1回研修会や会議を開催しているので顔の見える関係が構築されていた。

カフェ開催時には広報の配布や地域支援センター職員の参加など積極的に関わってくれた。

町内5事業所のグループホーム連絡会でオレンジカフェの説明及び実践報告を行ない他のグループホーム事業所へオレンジカフェを周知する機会が作られた。

また、地域包括支援センター職員が出向いている各地区のお茶のみ会の様子やお茶のみ会で上がった要望などの情報提供は今後のカフェ運営に生かされる内容であった。

5、 運営推進会議との連携

•運営推進会議のメンバーである民生委員の方の声掛けや区長の変わりに奥様が参加する等地域の方が安心して参加できる声掛けをしていただいた。

6、 地域との連携

•民生委員より地区の独り暮らしの方や日中独居の方に声掛けをして頂き参加に繋がった。

5回目終了後、地区の独り暮らしの高齢者の方について民生委員より相談があり、カフェを通じて地域に認知症の相談所として認識されたと感じた。

また、他事業所の施設長の方々も参加し、地域の介護事業所間とのコミュニケーションも図れた。

地域的には事業所主催の防災訓練時には、近隣の方々も参加し職員と一緒に消火訓練をするなど協力的な地域なのでオレンジカフェの意味や意義を周知する事で今後も地域の社会資源の一つとして連携を図っていくことが出来る。

カフェの広報を通じ12月から毎月1回ポプラ便りを発行する流れとなったので、今後も介護保険法や認知症に関する情報などを掲載し、認知症に対する偏見の解消に努めていきたい。

7、 認知症の人の役割

•地域の方が来所する前にカフェに集まりお出迎えした。自慢ののどを披露したり、地域の方とカラオケでデュエットやお茶を進めたり、知り合いの近所の方と昔話をされ楽しい雰囲気を作ってくれた。

8、 開催による効果

•カフェの開催を重ねる毎にテーブルの配置や内容など運営方法の見直しを行うことで、良い雰囲気が自然と作り出され参加者の緊張感も和らいでいった。

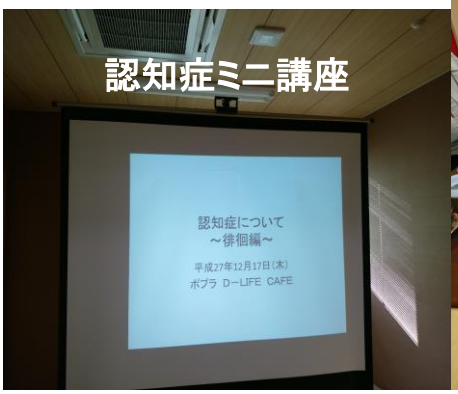
認知症の方の参加としてグループホームの入居者のみであったがグループホーム内のデイルームでのお茶のみ会とカフェに参加する時の表情が良い意味で違って見えた。グループホームのデイルームでは家で過ごしているように緊張感はなく生活の中の一部であるが場所を移動しいつもと違う雰囲気で顔見知りの方やそうでない近隣の方々と一緒という環境が良い緊張感となり認知症の方への刺激になったと思われる。

認知症の方の社会参加の重要性を職員も再認識するいい機会になった。

地域の方はグループホームやデイサービスの中に入り認知症の方やスタッフと話をしたり歌を歌ったりしたことで認知症の方と一緒に出来る事があると知り、距離が縮まったのではないかと感じた。

カフェでポプラ劇団による認知症劇の披露や認知症ミニ講座などを行ない地域の方に認知症に対して興味を持って頂く良い機会になった。

5回目終了後、地域の方から「次回から地域のお茶のみ会と一緒に出来たらいいね」という提案を頂いたことが地域に認知症カフェとして認識されつつあることが大きな効果だったと思う。



9、 課題

・オレンジカフェ（認知症カフェ）の認知度を高めることが最大の課題であり、行政区の中に必ずカフェがある事が当たり前になるような住民の意識を高めていくための周知方法の確立。

・認知症に特化したカフェとして、普通のお茶のみ会と混同しないオレンジカフェ本来の目的を明確に種々の方法を考え実践していく必要性。

・事前に参加者のニーズの把握

（認知症について話を聞きたいのか？　話をしたいのか？興味本位なのか？など）

・多様なボランティアの参加要請やコーディネート、ボランティア保険加入など。

・参加者は、認知症という病気を理解されていない方が多く、認知症の方が話した言葉を鵜呑みにし、誤解を招く結果になったので認知症を正しく理解するための認知症基礎知識と啓発活動が必要。

EX:カフェで自分の娘が亡くなったと涙を流して話された。

娘さんと同級生の娘を持つ参加者が、　娘さんの嫁ぎ先へ弔問に行ったら健在であった。

・継続していくために室内だけでなく、開催場所や天候を鑑みてテラスカフェなど趣向を変え、30～40代の方も参加しやすい日時設定や環境、地域づくりなどが課題。

10、考察

認知症カフェを 5 回開催し、回を重ねる毎に地域に少しずつではあるが認知症の方が入所している介護事業所として周知されてきている事や参加された方が入所されている認知症の方と進んでコミュニケーションを図ろうとする姿勢を感じた。また、認知症の方がお話ししている時、遮ったり先に話したりということなく地域の方々が自然と傾聴の姿勢になっていたので認知症の方も自然体でいる事が出来たと思われた。カフェを開催するまでは地域と事業所の間には、目に見えない薄い膜のようなものが少なからず感じられていたが自然と溶けていったように感じた。良い雰囲気の中でカフェを開く事が出来たことは大きな成果だったと思う。今後もカフェを続けていくことで、認知症に対する偏見をなくし、認知症になっても地域の人に受け入れられるような地域づくりに一介護事業所として一役を担っていきたい。

オレンジカフェ開催記録

運営母体	事業所名	担当責任者
有限会社ポプラ	グループホーム歩風楽	管理者　及川みき子

開催日|　平成27年　１０月　２１日　　AM10：00～12：00
活動場所　地域交流室
運営スタッフ　　管理者（　１　）人　　介護員（　３　）人　　その他（　２　）人　計　６　人

参加者	地域の認知症の人	介護家族	地域	専門職	ボランティア	認知症サポーター	その他	計
	6人	0人	4人	1人	0人	0人	6人	17　人

費用　　参加者１人 100　）円

参加費	事業所	その他		
1,100　円	2,000　円	1,500　円	計	4,600　円

①広報
　方法
前回同様、地域包括支援センターよりパンフレットの配布。事業所掲示板にパンフレットを掲示した。

　効果
地域住民の参加につながった。

　課題
カフェに興味があるが、開催曜日が自分のスケジュールに合わないとの声をいただいたので、開催曜日の見直しと定期の日に決定すべきか検討する必要がある。

②環境(雰囲気,セッテイング)
　方法
前回同様。飲み物はホットを中心にアップルティーやこぶ茶などを追加した。

　効果
アップルティーや昆布茶を希望する方が多かったので季節に合わせた飲み物を用意したことで参加費をいただくことに抵抗感がなくなった。

　課題
季節感のある飲み物や茶菓子の選択などに気を使う必要がある。開催場所の雰囲気も季節感を感じるようなレイアウトが必要。

③プログラム
　内容
自己紹介し、隣同士や向かい合わせの参加者と談話して、時間が経過した。

　効果
認知症の方も地域の方々とお話をすることで、リフレッシュ出来、笑顔が見られる。地域の方も優しく接してくれているので和やかな雰囲気で時間が経過した。

　課題
カフェの周知方法が不足している、カフェの認知度アップに工夫が必要。

④準備物
テーブル・椅子・テーブルセンター花・飲み物各種・お茶菓子（下肢、漬け物、果物、お浸し）
メニュー表・ホワイトボード

⑤その他

認知症カフェ　東部モデル事業　実施報告書「グループホームあさみず」

１）　事業所の概要および地域の特徴

①　事業所の概要

医療法人　仁泉会　グループホームあさみず

・平成１３年３月３０日開所（平成２１年６月１日　法人名称変更）

・鉄筋平屋建て　４ユニット３３名（１ユニット９名、他３ユニット８名）

・老健施設等と併設

②　地域の特徴

グループホームあさみずは登米市中田町にあり、隣町は岩手県という県内でも北部地域に位置している。北上川の近くにあり豊かな自然に囲まれ、「献上米の里」として農業が主たる産業であった土地柄である。近隣には日本三大弥勒の一つである長徳寺弥勒寺や、源義家が建立したと言われる上沼八幡神社、中田町出身の漫画家石ノ森章太郎氏のふるさと記念館や造形画家の佐藤達氏のアート・ミュージアムなどがあり、歴史的名所と近代的な文化施設が楽しめる場所となっている。また市内には白鳥の飛来地で有名な伊豆沼や長沼がドライブコースの範囲内で行ける環境にある。

平成２７年３月末の中田町内高齢化率は２８．４％、７５歳以上の推定認知症者数は４１９人（１６％）、推定軽度認知障害者数は１２５７人（４８％）である。

２）　オレンジカフェの取り組み

グループホームあさみずでは月に１回、毎月第４火曜日の１０時～１２時まで、中田町浅水地区にある浅水ふれあいセンター【公民館】の一室を借りて実施してきた。「あさみずふれあいサロン」という名称で開催。平成２７年７月から１２月までの計６回を実施した。

・カフェの準備

・開催の周知と目的の共有

場所を提供頂く公民館の職員と行政区長への主旨説明会を開催し、協力をお願いした。

浅水地区の民生委員と市内の地域包括支援センターへは開催の目的や予定、協力要請を文書にて連絡し共有を重ねた。開催地域の中田・石越地域包括支援センターへは何度か足を運び運営に関して色々と相談を重ねた。

・チラシの作成

地域の方々にわかりやすく、興味を引くようなチラシを考えて作成した。又カフェの目的や内容の説明の部分はストレートな表現にならないよう、多くの方が気軽に参加できるような工夫をした。毎月浅水地区（７２０戸）に行政区長を通して毎戸配布するチラシはオレンジ色のカラー用紙を使用し、配布時に目に留まるようにした。その他のチラシに関してはカラー刷りで配布をおこなった。

第３回目　ミニレクチャーの様子

・場所

グループホーム内では開催する為の場所の確保が難しく、また老健施設と同敷地内という地域の方には足を踏み入れるには敷居が高い立地条件であるため、地域の方が集まりやすく、公共性の高い場所を探すこととなった。会場使用料の負担が少なく、地区の住民の方々が参加しやすい場所を考えた時に、以前から地域の長寿健康づくり講座で交流のあったふれあいセンターのセンター長から場所の協力を頂けるということで、浅水ふれあいセンター（公民館）をお借りすることになった。参加者はほとんど車を使用し参加するか、乗り合わせで参加する方がほとんどであった。

第２回目　小物作りの先生と！

３）　広報

・チラシは毎月浅水地区（７２０戸）に行政区長を通して毎戸配布、
・民生委員から気になる方への配布や声掛け
・近隣の居宅・包括支援センター・介護サービス事業所への配布
・町内の薬局や病院へポスターとして掲示
・中田・石越地域包括支援センターの職員が地域のミニデイサービスで開催についての説明
・サポーター養成講座の後にカフェの開催を案内

第１回目はグループ室を借りて開催したが、市内の地域包括支援センター職員や行政、他事業所の利用者の方が多く集まり、総勢２４名の参加となり、提供頂いた一室では手狭になってしまった。第２回目以降から別室の研修室をお借りして開催した。開催回数を重ねる度に地域の方や介護をしているご家族の参加が増え、６回の平均参加人数は約１８人となっている。

４）　運営

・運営費として、参加費はお茶代として１００円を頂いている。
・会場の設営（テーブル配置、環境等）

第２回目以降はやや広めの研修室をお借りすることが出来て、テーブル配置をゆったりと設置することができた。毎回レクチャーを開いた為に基本的には教室タイプに前面を向く形にテーブルは設置し、テーブルクロス、ミニ鉢植えなどを準備した。また、資料や書籍を閲覧するコーナーやマッサージをするコーナーを設置した。備品としてポット、案内版、スクリーン、マッサージ用品などを購入準備した。

小物づくりに小学生も挑戦！！

・毎回、ミニレクチャーを開催し専門職の方に講話を担当して頂いている。地域の方はこのような専門職の方々と直接触れ合う機会が少ないようで楽しみに参加する方も多かった。
（今回はこの講師の方々は当法人の職員に依頼をしたので講師料は発生していない）
・マッサージはタクティールケアとリフレクソロジーの施術を資格を持つグループホームあさみずの職員が希望者に対して行っている。

地域の小学生も
一緒に口腔ケアの勉強中です。

5）　行政との連携（地域包括支援センター含）

登米市からは開催に関して主旨説明時に使用する町の高齢化率等のデータを提供頂いた。
カフェ開催時には第２回目以降から市内５ケ所の地域包括支援センターから２ケ所ずつ各１名の職員の協力を頂き、会場の設営、カフェ時の手伝い（飲み物の給士係、個別相談援助）後片付けなどの協力を頂いた。また登米市の職員もほぼ毎回カフェ開催時に参加頂き、準備、カフェ時の相談援助、後片付けなどの協力を頂いた。
オレンジカフェ地域報告会では事前に市内地域包括支援センターと行政、オレンジカフェ開催事業所が集まり打ち合わせを行い、内容の確認と検討、役割分担や情報共有・情報交換を行った。

6）　運営推進会議との連携

行政区長、民生委員の声掛けで参加する地域の住民の方が多く、運営推進会議時には参加状況や、その時に出た意見などをフィードバックするようにしている。また地域の実情を会議の場で確認したり、認知症の方への望ましい対応方法を検討する機会にもなっている。

7）　地域との連携

広報の効果で、実習生（通信制社会福祉士養成校等）の参加や、ふれあいセンターが参加の声をかけてくださり、参加に繋がる形も出来てきている。
他事業所の通所介護事業所の利用者様の参加や、訪問介護事業所の職員の方々の参加もあり、連携の幅が広がってきている。チラシの掲示をお願いしている薬局や病院も理解を示して快く協力をして頂いている。今後このような連携を広げ色々な枠組みを超越した関係性や繋がりを増やし、他事業所の職員の参加や医療職の参加も視野に入れ、継続していきたい。

8）　認知症の人の役割

毎回、カフェ開催時にはグループホームあさみずの入居者が１～５名程参加をしている。
お茶やお菓子の買い出し時の手伝い、カフェの時に出す漬物作り、果物の皮むきなどの事前

準備をして頂いている。
またカフェ開催時には、小物作りの先生になって頂き、千代紙での傘づくり、ビーズ小物作りなどを希望者に教えて頂いている。
その他では、脳トレーニングの計算ドリル、間違い探し、クロスワードなどを参加者の皆さんと一緒に行う場合もある。
認知症の人もまだまだ色々な力を持って、発揮できるのだと地域の方は感心して同じ時間を過ごしていかれていた。

９）　オレンジカフェ開催の効果

実際に自宅で認知症の方を介護しているご家族は、具体的な介護方法や自分の介護の方法や関わり方の確認の為に参加される方が多かった。普段の介護の大変さや家族や親戚の理解が深まらないことを他者に話し、支持してもらうことで安心して帰途につく方やこれからの自身の役割を再認識していく方などがいた。介護中の家族の方に、すでに介護を終わられた地域の方がアドバイスをしたり、共感する姿も見られた。また介護認定前の家族の相談事を地域包括支援センターの職員に繋げたり、認知症の症状や専門医についての相談を受け、有効な相談窓口（認知症専門相談）の紹介に至ったケースもあった。
地域の方にはミニレクチャーを通して介護全般や健康について関心を高めて頂く機会になり、認知症の予防方法や対応方法に興味を示す方も多く、カフェで知ったその知識を実践しながら身近な人や友人に教えているという話も聞かれた。
全体的には談話の中での傾聴、個別のマッサージなどが気分転換やひと時の癒しの時間に繋がっていたようである。

１０）今後の課題

開放感があり、誰でもが人目を気にせずに参加しやすい場所での開催にと考えて公民館の使用に決めたが、認知症という名称がつくと過敏に反応して敷居が急に高くなるようであった。認知症の人を抱える家族の参加は見られたが、認知症の初期の方の参加は更に抵抗感があり、家族や地域の方がカフェへ声をかけることへの戸惑い、初期の方が自分が認知症とは認めていないので利用に繋げられなかったケースもあった。周知を図り、敷居を低く保つ工夫が大事になる。
また公民館という場は、その地域の方は利用しやすいが、他市町村などの他地域

介護相談や認知症予防について専門職が対応

の方々には敷居が高く、利用をためらう場所であることに気づいた。実際に他地区や他町の方から問い合わせやケアマネからの紹介があっても参加には繋がらなかった。
ミニレクチャーの後は自由に過ごして頂くが、個別のニーズに合わせて対応していく時間になる。個別対応のためには、カフェへの協力スタッフやボランティアを多めに確保し、個別相談、認知症予防の脳トレ、マッサージ、小物作りのスキルやその支援が可能な知識や経験を身につけた支援者が必要になる。
運営・協力スタッフの育成を計画的に行い、地域性に関する知識、認知症に関する理解、レクチャーを豊かにするネットワーク、対人援助技術も身につけていく必要性を感じた。
より豊かなオレンジカフェにしていくには、開始と終了の際に行うミーティグの充実や定期的なスキルを磨く研修時間や情報共有の為の打ち合わせも大切である。
これまでは、事業所が中心となり進めてきたオレンジカフェだが、今後は地域の人々や専門職が顔の見える関係を構築していく必要があるため、１つの事業所が母体となるよりも地域の多くの組織や団体が集まってカフェを一緒に運営していくことが重要になると思われる。
また地域の核となる人材を集めていくために、認知症サポーター養成講座修了者の中からボランティア活動に興味を持つ方や更なる認知症に関する知識を深めたい方に協力を持ち掛ける仕組み作りも必要であろう。

１１）考察

オレンジカフェは様々な連携やパイプ役のツールになるものと考える。私達のような地域との関わりに課題を感じている事業所にとっては一歩前に踏み出せる機会になる。必然的に行政区や町内会、民生児童委員の方々の協力を得る必要がある。地域住民の代表と言われる方々の声掛けや協力が地域の方々の背中を押し前に進むきっかけになるようである。
また、これから認知症の初期診断や初期集中支援チームの体制が地域の中で出来上がってから診断を言い渡され不安な認知症のご本人や家族はどこに相談しに行けば良いのか？必ずしも介護サービスにすぐ結びつく方々ばかりではない。受け入れられず、これからのこと、認知症のことを少しずつ受け入れるには時間と場が必要である。診断の後のフォローや必要な支援を考える場所がオレンジカフェになり得ると思う。その中で認知症の方本人が活き活きと活躍する姿は多くの人や地域の偏見の壁を低くする効果にもなり、初期の診断を受けた方々が受け入れしやすい場になると思われる。また地域の中で実態把握調査が行われ推定軽度認知障害者数が明らかになり７５歳以上の半数近くがその対象者となっている。適切な認知症に対する理解と予防が認知症への移行軽減に効果があることを多くの住民は知る機会を持つ必要がある。そのような情報提供が出来る場にふさわしいのもオレンジカフェである。
これまでは、事業所が中心となり進めてきたオレンジカフェだが、今後は地域の人々や専門職が顔の見える関係を構築していく必要があるため、１つの事業所が母体となるよりも地域の多くの組織や団体が集まって地域の財産としてカフェを一緒に運営していくことが重要になると思われる。

オレンジカフェ開催記録

運営母体	事業所名	担当責任者
医療法人仁泉会	グループホームあさみず	管理者　佐々木真弓

開催日時　　H27年　１０月　２７日　　AM10：00～12：00
活動場所　浅水ふれあいセンター　研修室
運営スタッフ　管理者（　１　）人　　介護員（　３　）人　　その他（　　）人　　計　４　人

参加者	地域の認知症の人	介護家族	地域	専門職	ボランティア	認知症サポーター	その他	計
	4人	3人	5人	4人	0人	0人	0人	16　人

費用　　参加者１人　600　　）円

参加費	事業所	その他	計
5000　円	4600　円	0　円	9600　円

①広報

方法

- 包括支援センター職員が地域のミニデイで広報活動
- 地域にチラシ配布（７２０戸）、ポスターの掲示（薬局、病院）
- 配布（居宅、包括、知人、家族）　・民生委員への依頼

効果

- ミニデイで話してもらう事で集客があがった
- 電話問い合わせがあった

課題

- 地域への周知や啓蒙

②環境(雰囲気,セッテイング)

方法

- テーブル分け、花を置くなどの工夫
- 飲み物などはセルフ
- 音楽を流す、アロマの利用

効果

- 和やかさや安堵感は演出できた
- 場所を広い所に移したので相談援助がしやすかった

課題

- 人数が多くなった時のテーブル配置や振り分け

③プログラム

内容

- ミニレクチャー・・・「リフレクソロジーで健康に」（あさみずの職員）
- 脳トレ　　・予防法
- マッサージの施術

効果

- 自由な懇談時間を多く取りゆったりと話すことが出来た
- マッサージも好評

課題

- 相談援助にのれる職員が複数必要
- 参加する方のニーズに合わせた対応

④準備物

- ポット、お茶セット、小物作りの物品
- 菓子、果物、漬物

⑤その他

- マッサージ用品、オイル

認知症カフェ　仙台モデル　実施報告書　「グループホームゆうゆう・多賀城」

グループホーム紹介

株式会社　アルテディア
グループホームゆうゆう・多賀城
・平成 15 年 11 月 1 日開所
・鉄筋平屋建て　　３ユニット 27 名　（1 ユニット　９名）

地域の特徴

グループホームゆうゆう・多賀城は、東に 10 分ほど歩くと仙石線多賀城駅、西に１０分ほど歩くと東北本線国府多賀城駅がある多賀城市高崎地区の閑静な住宅街に位置しており、仙台都市圏ベッドタウンとしての一角にあり、市西部には水田地帯が広がり、ゆうゆう・多賀城の散歩コースには多賀城廃寺跡、歴史資料館などがあり、桜の季節にはお花見に出かけ、あやめ祭りなど四季それぞれの催し物に気軽に参加することができます。また、塩釜や松島などへのお出かけも車で 15 分範囲内で行けるという便利さもあります。

オレンジカフェの取り組み

グループホームゆうゆう・多賀城では、月に 1 回 14:00～16:00 まで、施設内にオレンジカフェを設け平成 27 年 7 月から 11 月の間、合計 5 回開催しました。

1　オレンジカフェ準備

・目的の共有
地域包括支援センター・行政・民生委員・：ボランティアと集まりカフェの目的を何度も話し合い、ハンドブック等も参考にして共有を重ねた。

・チラシの作成
事業所（中心となる場所）の独自性を考え、覚えやすく頭に浮びやすいデザインにし、又カェの目的を記載する際に、ストレートになりすぎ敷居が高くならないよう、且つ理解しやすいように工夫をした。

・場所
グループホーム内では、入りにくかったり、参加しにくいのではないか等を話し合い、地域数か所の集会場などを拠点とし出張カフェとして開催する事を検討したが運営、周知面など考え当面はグループホーム内で行うことに決定した。しかし開催するには外から分りにくく、誘導者が必要である。

1 回目の開催です。
初めてなので皆さん緊張気味です。

２　広報

・グループホーム掲示板（地域と共有した掲示板）への張り出し
・地域へのポスティング
（民家へのちらし配布）・美容院へ設置
・行政窓口
・地域回覧版
・民生委員集まり時へ配布
・包括支援センター
・地域キャラバンメイト連合会での話し合いと配布

２回目　踊りだす方もいらっしゃいます。

お知らせが幅広く行き渡ることができ、他市地域包括支援センター含めた行政や民生委員の方が多く集まっていただき初日総勢 38 名となり会場も狭く賑やかなカフェとなった。楽しい時間を過ごすことができたが、地域の方や介護家族、又は当事者の参加を促す事が第一の目的であることから、関係機関の参加人数は前もって把握することが場作りに重要である。参考として５回の平均参加人数は約 20 名になっている。

３　運営

・運営費については、参加費お茶代として 100 円をいただいている。
・設営（テーブル配置等）
普段と違う雰囲気を大事にした。メインテーブル・サブテーブル・相談コーナーに分け、テーブルクロスや一輪挿し、鉢植え等を季節に合わせ（夏、秋、冬と経験した）用意した。
準備する段階で、入所参加者はテーブルクロスを何度も敷き直したり畳んだり、又花の見えやすい位置を考えたり、お客様を迎える準備をされた。

４　行政との連携（地域包括支援センター含）

カフェの目的を何度も話し合い、認知症についての地域の課題や今後の取り組みなど共有し、キャラバンメイト受講者を中心とたカフェ運営スタッフ（ボランティア）養成を計画し、５回開催した際のカフェ報告会を第 1 回目の養成講座として実施した。
また、多賀城地域キャラバンメイト連合会でカフェについての理解が深まり、すでに取り組みが行われている団体、これから取り組む団体などが表面化し情報共有を行ったり、話し合いがもたれたりと、地域のまとまりが見られている。

お茶菓子は　羊羹　おせんべい

５　運営推進会議との連携

民生委員の繋がりによる参加者が増え、ギターを弾いてくださるボランティアの紹介や、地域の方への呼びかけに協力が得られている。

６　地域との連携

関係者広報の効果で地域の薬剤師、研修生（看護学生）等の参加や、民生委員を通じたボランティアの参加などカフェ回数を重ねる度に繋がりが広まっている。このようにカフェ運営に理解や興味を示す人たちの参加によって少しずつではあるが広く地域に行き渡るのではないかと思う。

また、他通所事業所を利用している方５名がスタッフと共に参加もあったことは、地域の当事者や家族の参加を呼び掛ける為にも重要な連携のひとつである事、そして地域密着の GH の特性を生かし、近隣の美容室、郵便局、八百屋などへのチラシ設置の依頼をすると共に、今後も、行政含め運営推進委員、地域民生委員横事業所間の連携を核にし、継続した広報と開催を行いたい。

７　認知症の人の役割

お茶やお茶菓子の買い出し、テーブルセンターをかけたり、お花を設置したりの準備や、お出迎え、お茶出しなどしていただいている。

８　開催による効果

認知症の方の参加は、GH 入居者が中心となっている現在だが、回数を重ねるたびに当初から参加している民生委員さんやボランティアの方々は入居者を通して認知症への理解が深まっている。また、認知症の入居者が毎日生活する中での不安や気がかりは、カフェの時間帯解消されている様子で、歩き席を離れる方もいない。

カフェの準備にそわそわしたり、始まりに楽しみを感じている様子が伺える。

そしてカフェにかかわった職員は自分の職場であるグループホームの地域での役割を実感・体感したという。

３ 回目あたりから、地元ではない方の問い合わせや参加があった事から、ご本人や家族の第１歩に繋がるよう他地域と連携を図り、参加したい時に参加しやすい身近なカフェを紹介し合う相乗効果を期待します。今後各地域で開催される月予定（カフェマップ）を作成し各開催地域と共有したい。

４回目　ギター生演奏
ボランティア

9　課題

GH を開放することにより、地域の方の認知症の理解が高まったことや、専門職の自覚が高まったメリットもあるが、カフェ本来の意味を考えた時、地域の認知症の方やご家族の入りやすさ、気楽さ、過ごしやすさを考えた GH とは別の場所を確保したい。その場合、場所代や光熱費の問題、加えて飲食物購入費などの運営費用が課題になることは避けられない。又、ボランティアを中心とした運営スタッフの育成を認知症の理解を含め計画的に行い、進行・ファシリテーター・話し方・傾聴・相談・くつろぎなど、スタッフ配置（適材適所バランス考慮）にも気を配りたい。そのためにも、カフェ開始の打ち合わせと終了後の振り返り「カフェ目的の確認」「その日にあった事の確認と共有」を行う時間を設けることが必要である。

囲んで懐かしい歌を唄いました。

10　考察

今回の「認知症事業カフェモデル事業」に参加し、認知症になっても安心して暮せる町つくりを地域の方や職員と考えることができました。その機会を与えられた事に感謝し、カフェ開催の目的を確認しながら継続してゆきます。

オレンジカフェ開催記録

運営母体	事業所名	担当責任者
株式会社アルテディア	グループホームゆうゆう・多賀城	松本　裕子

開催日時　平成27年　１１月　２７日　ＰＭ14：00～16：00
活動場所　グループホームゆうゆう・多賀城　もえぎユニット
運営スタッフ　管理者（　１　）人　介護員（　３　）人　その他（　４　）人　計　６　人

参加者	地域の認知症の人	介護家族	地域	専門職	ボランティア	認知症サポーター	その他	計
	10　人	0　人	6　人	0　人	4　人	0　人	0　人	20　人

費用　参加者１人（　100　）円

参加費	事業所	その他		
円	円	円	計	1,250　円

①広報
方法
行政及び地域包括支援センターとの連携　高崎地区へのチラシ配布
GH掲示板へ提示
民生委員の協力
効果
運営中心となる行政、地域包括支援センターとの連携に効果が見られ幅広くお知らせが行き届いた

課題
地域、他地域への継続したお知らせが効果的であるため、配布地域などを把握すため計画的に行う。

②環境(雰囲気,セッテイング)
方法
シクラメンの鉢植えを2鉢用意
ギター生演奏のＢＧＭ

効果
シクラメン鉢植えで季節感を味わっていただいた。
また、ギター演奏では、シクラメンにちなんだ曲を弾いていただいた。

課題
季節を感じたり、雰囲気については今後も工夫を凝らしたい

③プログラム
内容
ギター演奏と、演奏に合わせた合唱
健康体操　お茶のみ　リクエスト

効果
お茶のみと、お話を中心とした。皆さん会話が弾み、次のプログラムへの意向をするタイミングがわからないほど楽しく過ごされた。

課題
地域の方の参加

④準備物
お茶道具　お茶菓子　テーブルクロス　花　椅子

⑤その他

認知症カフェ　南部モデル　実践報告書「グループホームもみの木」

NPO 法人もみの木会　グループホームもみの木
・平成 15 年４月１日開所
・木造平屋建て１ユニット９名

会場には手書きのウェルカムボードと
次回開催日を掲示

【地域の特徴・事業所紹介】
グループホームもみの木は宮城県南部の仙南圏に位置する柴田町にあります。柴田町は「樅ノ木は残った」で有名な船岡城址公園やお花見の名所・白石川堤一目千本桜があり、一年中四季折々の散策を楽しめる環境に恵まれています。事業所はスーパーや小学校が隣接する住宅街の一角にあり、買い物や散歩の際には子供達の元気な声が響きます。近くには仙台大学があり福祉実習生やインターンシップの受入れを積極的に行い、地域福祉の人材育成に貢献出来るよう努めています。また毎年地域住民参加型の行事(バーベキューや芋煮会)・消防訓練を開催して地域との連携強化に取り組んでいます。

【オレンジカフェの取り組み】
平成 27 年８月から 12 月の期間、毎月１回（時間は変則）オレンジカフェを設置し開催。

１　準備
・関係機関・協力機関との事前打ち合わせ
　地域包括支援センター・行政・民生委員と集まりオレンジカフェ開催についての話し合いを行った。広報や運営方法の確認。
・運営推進会議にて事業説明
　２か月に１回開催している運営推進会議において委員（区長・民生委員・地域住民代表）へ事業説明と協力依頼を行った。
・入居者家族へ説明
　家族会や文書で事業開始の説明行い同意を得た。
・事業所内にてオレンジカフェ研修会
　運営スタッフとなるグループホームスタッフに向けてオレンジカフェの目的や意義について研修会を開催。コンセプトやプログラム・チラシ作成・会場準備などについて話し合った。
・会場・備品などの準備
　会場は同法人グループホームつくしの会議室。立ち寄りやすい雰囲気を演出するためウェルカムボードを設置・会場をカフェ風に設営(テーブルクロス・一輪挿し・観葉植物などでカフェ風の雰囲気を演出してゆったりと寛げるような BGM を流す)・お茶やお菓子などは好みに合わせて選んで頂けるよう準備する・コミュニケーションがとりやすいように吊り下げ名札を用意。

２　広報

・「町民憩いの日の集い」にて区長より地域住民へ呼びかけ
・町内会の掲示板にポスター掲示
・施設玄関前にポスター掲示
・同法人の小規模多機能型居宅介護やデイサービスにポスター掲示
・運営推進委員(区長・民生委員)や行政からご協力頂き、認知症の方々や地域住民・ボランティア・認知症サポーターへ声掛け
・チラシを作成して近隣住民へ配布
・１回目以降は、会の終了時に次回開催日を告知

３　運営

・運営費・・・参加費は無料とした。
・オレンジカフェ開催状況

「第１回もみの木オレンジカフェ」
地域包括支援センター主任の出前講座

第１回もみの木オレンジカフェは８月６日午前 10 時 30 分～オープン。区長と民生委員に連れられて数名の地域のお年寄りが参加。少し緊張していたのか、どうしたら良いか戸惑っている様子。運営スタッフであるグループホーム職員が元気よく挨拶すると少しほっとしたような表情になり笑顔が見られた。行政の方や認知症サポーター・ボランティアも加わり会場はあっという間に満席状態となり、各テーブルでは自然と自己紹介や季節の話題・料理・健康についてなど話が弾み賑やかなお茶飲み会が始まった。地域包括支援センター主任より暮らしに役立つ出前講座ということで「熱中症予防」についてお話して頂き、参加者の方々からは「とってもためになった」と好評だった。最後に次のカフェ開催日時の告知を行うと、忘れないようにと何度も日にちを確認して満足そうな表情でお帰りになる方や施設見学を希望して案内を聞いている方の姿も見られた。

「第２回もみの木オレンジカフェ」
実習生も参加して楽しそうです

第２回もみの木オレンジカフェは９月４日午後３時～オープン。第１回目に参加された方々はすっかり顔馴染みとなった様子でお互いに声を掛け合っていた。この回は実習生の参加があり若者からお年寄りまで幅広い年代の方が交流する場となった。「若い人の話を聞くと若返るね」と嬉しそうな声があちらこちらから聞かれた。第１回に引き続き地域包括支援センター主任から出前講座として「オレオレ詐欺」についてのお話をして頂き、参加者は真剣な表情で聞き入っていた。

第３回もみの木オレンジカフェは 10 月３日午後 12 時 30 分～法人主催の「芋煮＆サンマ祭り」と合同開催。今までと趣向を変えて会場を屋外(施設駐車場)に設置。テントやアウトドア用の椅子・テーブルをセットして“祭り”の BGM を流し、室内とは違った活気溢れる会場となった。事前に「気仙沼直送の獲れたてサンマを目の前で炭火焼します」という内容の広報(チラシ配布)を行っていた効果もあり、地域住民が誘い合って参加していた。室内とは違う開放的な雰囲気に参加者からは大きな笑い声も聞かれ大いに盛り上がった。

「第３回もみの木オレンジカフェ」
晴天に恵まれて芋煮会日和でした

第４回もみの木オレンジカフェは 11 月５日午後３時～オープン。ラジオ体操講師の資格のある地域の方に講師として参加して頂き「ラジオ体操講師による運動講座」というアクティビティを取り入れての内容となった。ラジオ体操の基本を身体を動かしながら細かく指導して頂き、誰でも知っているラジオ体操も真剣に行えば十分介護予防になることを実感した。体操で汗をかいた後は、テーブルや椅子をいつものセッティングに戻して、お茶飲み会と「認知症の基礎知識」というテーマでミニ研修会を行った。

「第４回もみの木オレンジカフェ」
音楽に合わせて伸び伸びと！

「第５回もみの木オレンジカフェ」
グループホーム入居者による踊りの披露

第５回もみの木オレンジカフェは 12 月 14 日午前 10 時～手工芸「クリスマスリース作り」開催。ドライポプリの花を使用して思い思い自由な作品作りに挑戦して頂き個性豊かな素敵な作品が完成した。リース作りの後は懐かしい歌の合唱。「雪」「お正月」など季節の歌を声高らかに歌った。そして最後にグループホームつくしの入居者による「さんさ時雨」の踊りの披露も飛び出し、歌あり踊りありの楽しいカフェとなった。

４　行政・地域包括支援センターとの連携

事前打ち合わせ・経過報告・相談・検討・評価など何度も話し合いを行い、広報やプログラムについてのアドバイスを頂き、認知症サポーターやボランティア・地域住民への呼びかけ・出前講座など、運営全般についてサポートして頂いた。

５　運営推進会議との連携

地域住民への呼びかけ・地域のお年寄りがカフェ参加時の送迎など協力して頂いた。準備段階から運営まで事業全般に関わって頂いたのは初めてであり、関係性が強化されたと感じる。

６　地域との連携

地元・仙台大学インターンシップの参加や町内のラジオ体操講師のボランティアとしての参加な

ど、地域資源の活用が出来た。また、地域住民の認知症やオレンジカフェへの関心が高まったことにより、今後いっそう取り組みが広がっていくのではないかと期待される。

7　オレンジカフェにおける認知症の方の役割

グループホームの入居者が毎回参加していて、会場準備や掃除・チラシ折り・カフェで使用した布巾の洗濯や食器洗い・会場の後片付けなど、様々な場面で活躍していた。地域との交流の機会を持つことで、昔培った社交性が蘇りその力を発揮できる場になっていたのではないかと感じる。

8　開催による効果

認知症の方への効果として近くに気軽に立ち寄れる居場所が出来て表情に変化が見られた。地域への効果として、認知症の方も認知症でない方も自然に交流する姿が見られた。認知症の方も溶け込める地域コミュニティを形成できる可能性を感じる。ボランティア・認知症サポーターの方からは、研修会や講義とは違い実際に認知症の方と関わることで理解を深めることが出来た・施設職員の認知症の方への接し方を見て勉強になった等々の声が聞かれた。運営スタッフからは、地域で暮らす認知症の方と出会うことで認知症ケアを通した地域づくりへの役割に気づくことが出来た・地域の方々との交流を通して事業所の持つ可能性に気づくことが出来た・地域や行政・専門職の方々と協力体制を構築し、共に地域づくりについて考えることが出来たと思う、とたくさんの気付きが生まれた。以上のように、誰でも自由に気軽に参加出来るという点から、いろいろな立場の人が喫茶店に立ち寄るように集まってきてざっくばらんに交流することにより多面的な効果が得られると思う。

9　課題

今後の課題としては、人材確保の必要性が挙げられる。今回はグループホームスタッフが主となり開催してきたが日常業務をこなしながらのカフェ運営であったため毎月の開催日時を固定化することが出来ず変則開催となってしまった。「毎月◯曜日の◯時～」と固定することが出来れば、もっと地域の方も参加しやすかったと思われる。今後はオレンジカフェの目的を理解し認知症ケアを習得しているボランティア・認知症サポーターの育成を強化し、主となってオレンジカフェを運営していけるような取り組みの必要性を実感した。

10　考察

今回の取り組みを通して、「認知症カフェ(オレンジカフェ)」について現在名前だけが独り歩きしてしまい、その目的や意義を正確に理解出来ていない人が多いことに気が付いた。地域性の問題もあるが、「認知症」と名が付いただけで自分とは無関係と感じてしまう人も多い。また、運営する側も、オープン前は何から始めたら良いか分からず試行錯誤の連続で実際に開催する中で徐々に運営に関する技術・手法が確立されていくのを感じた。今後更にオレンジカフェが普及・発展していくためには、各地域でのオレンジカフェについての啓蒙・普及活動の継続とモデルとなる事例を参考に出来るような手引書やガイドラインの作成・実施状況について第三者による指導・助言・評価を受けられるシステムの構築が必要であると感じた。

オレンジカフェ開催記録(第１回)

運営母体	事業所名	担当責任者
NPO 法人もみの木会	グループホームもみの木	グループホームつくし管理者我妻佳代

開催日時　平成 27 年８月６日　10 時 30 分～12 時 00 分

活動場所　グループホームつくし会議室

運営スタッフ　管理者(　２　)人　介護員(　２　)人　その他(　３　)人　計　７　人

参加者	地域の認知症の人	介護家族	地域	専門職	ボランティア	認知症サポーター	その他	計
	３人	０人	５人	４人	１人	１人	４人	18 人

費用　参加者１人(　610　)円

参加費	事業所	その他	計
０円	０円	10,982 円	10,982　円

①広報

方法
- 7/16「第２回運営推進会議」にて運営推進委員へ開催説明と声掛け等の協力要請行う。
- 7/19・7A 区「町民憩いの日」にて区長より地域住民へ呼び掛けして頂いた。
- 町内会の掲示板へポスター掲示。
- つくしの玄関前にポスター掲示。
- 運営推進委員(区長・民生委員)より地域の認知症の方々・ボランティア・認知症サポーターへ声掛けして頂いた。
- 次回(9/4)の開催日について、会場に大きく日時を貼り出して告知行った。

効果
- 運営推進委員会を活用して地域の代表である区長や民生委員に開催説明を行い地域住民へ声掛けして頂いたことでスムーズに地域への広報活動が行えた。

課題
- 第１回目ということで専門職や運営スタッフの割合が高かった。次回からは参加者のバランスを考えて調整していく。
- 運営推進委員より、認知症の方々への声掛けは個人情報の問題がある為、配慮が必要であるとのご意見聞かれる。地域の皆様から情報を頂きながら、広報活動について検討していく必要がある。

②環境(雰囲気、セッティング)

方法
- つくし会議室を“カフェ風”に会場設営する。明るく心地良い空間作りを行う。
- 玄関前にウェルカムボードを設置。立ち寄りやすい雰囲気を演出する。
- お花や観葉植物を飾り、ゆったりと寛げるような BGM を流す。
- お茶やお菓子等、好みに合わせて選んで頂けるよう準備する。
- コミュニケーションがとりやすいように吊り下げ名札にお好きな名前を書いて頂く。

効果
- 名札にお名前を書いて頂いたことで、コミュニケーションがとりやすかった。
- 明るい雰囲気の会場設営を行ったことで、話しが弾んでいた様子だった。
- 気温が上がり暑い日だった為、急遽冷たい飲み物を準備したところ好評であった。

課題
- 会場が決して広くはないので、あまり人数が多すぎると息苦しさを感じる。今回位の人数が丁度良いと感じた。次回からはお集まり下さる方々の人数を見ながら、職員等運営スタッフの人数を調整していく。

③プログラム

内容
- お茶飲み会を通しての情報交換会。
- 地域包括支援センター主任より暮らしに役立つ情報コーナーを担当して頂き、今回は「熱中症予防」についてお話し頂いた。

効果
- 包括主任からの情報コーナーは、お茶飲み会の話題作りにもなり大変効果的だった。

課題
- 今後は、参加者の方からも特技など発信して頂き、お茶飲み会だけではない楽しさも盛り込んでいきたいと感じた。

④準備物

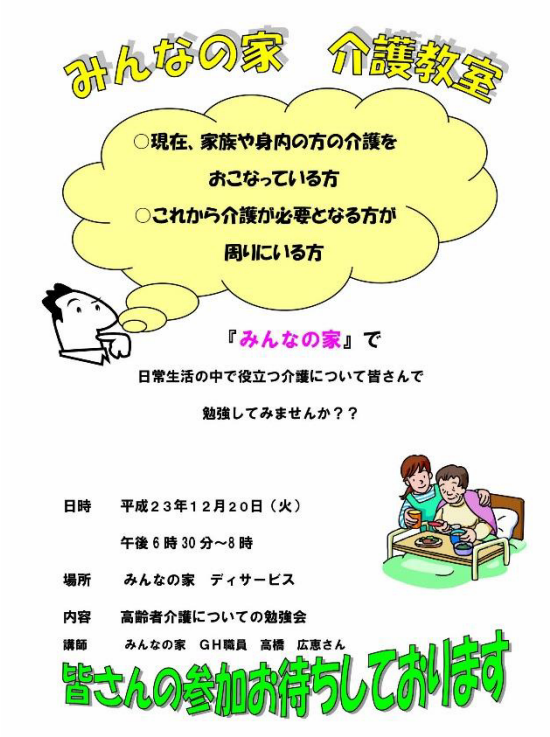
・コーヒー・紅茶・日本茶(ホット・アイス)・ジュース・お花・お茶菓子・スリッパ・名札・筆記用具
・ウェルカムボード・CD・テーブルクロス・ウェットティッシュ・布巾・クーラーBOX・ポット

⑤その他

- 当日、民生委員の方で風邪症状がある為、退席した方がいた。今後は感染症についても対策が必要。

認知症カフェ　東部協力事業所　実践報告書　「グループホームみんなの家（錦織）」

＜事業所概要及び地域の特徴＞



運営法人は有限会社みんなの家、平成 18 年３月登米市中田町に「小規模多機能介護施設みんなの家」を開所。「通って、時々泊まって、住むこともできる」認知症の方にとって使い勝手の良い、登米市初の複合型介護施設で、同一建物の中に、デイサービス・ショートステイ、そして「グループホームみんなの家」があります。

平成 24 年７月「グループホームみんなの家錦織」を、平成 25 年６月にデイサービス・シェアハウスを開設し、東和町錦織にも複合型介護施設を運営しています。

登米市は人口８万余り、東に北上川、西に迫川が流れ、平坦で稲作や畜産が盛んな農村地帯で、

中田のみんなの家は、登米市のほぼ中央、東和のみんなの家錦織は北東部に位置しています。

どちらのグループホームも、１ユニット（定員９名）、ホールを使って、３名定員の共用型の認知症デイサービスを行っています。

＜実施状況＞

開設当初より、外部の講師を招いて職員研修を行っており、同業他社の職員や地域の方々、施設利用のご家族などにも声掛けし、一緒に勉強する機会を提供していました。

そこから、職員研修を兼ねてはいるものの、地域の皆様への情報提供、勉強の場の提供ということで「家族介護教室」へと形を変えました。

次には、講和形式の一方的なお話より、参加者同士の和やかな語らいの場の提供、ということで、カフェ形式がいいのでは、と「介護・井戸端カフェ」と形式も名称も変えて、現在の「オレンジカフェ」へと引き継がれてきました。

はじめは、夜にデイサービスホールを使い大人数での開催でしたが、昼のほうが参加しやす、人数も少ないほうが、ということでグループホームへと場所を移しました。

地域包括ケア情報提供書

発信元	施設名		情報提供担当者名
	グループホームみんなの家		総務部長　熊谷寛史
	連絡先		ＦＡＸ番号
	0220-34-7464		0220-34-5727
	メールアドレス		
情報種別		①講演会・研修会・意見交換会などの開催	
		②施設見学の実施	
		③サービス情報	
		④イベント情報	
		⑤施設情報（新設・移転・廃止・管理者の変更など）	
		⑦連絡事項	
提供目的		①周知のみ	
		②参加者募集	
		③情報共有	
		④情報提供	
		⑤その他（具体的に）	
	※その他の具体的な理由		
配信希望先		①全ての施設	
		②医療機関（病院、診療所、歯科診療所、薬局）	
		③老人保健施設	
		④老人福祉施設	
		⑤その他介護事業者（具体的に）	
		⑥ケアマネジャー・地域包括支援センター	
		⑦その他（具体的に）	
	※その他の具体的な理由	⑤認知症対応型共同生活介護・認知症対応型通所介護・通所介護の各事業所	

【内　容】※添付資料が無い場合は、下記に本文を記載願います。
認知症の方が、地域での暮らしを継続できるよう、地域の方々に認知症の理解を深めて貰うこと、また認知症の方やご家族が気軽に出掛けて、話し合うことが出来る場所の提供を目的として開催します。

送信先メールアドレス：kenkosuisin@city.tome.miyagi.jp（健康推進課）

・準　備

各事業所（デイサービス・ショートステイ・グループホーム）から選任された「研修委員会」が中心となり、年間研修計画に組み込み、会議の中でテーマ・講師・準備物などを決めます。

その時々の話題や季節の流行などに合わせ、また前回参加者へのアンケート結果を基にして、次回のテーマを決め、講師の選定、依頼を行っています。　ほとんどの方が快く承諾してくださいましたが、都合もあり、決めたテーマや日時で開催出来ない時もありました。

・広　報

毎回、A4 判のチラシと案内文を作成し、配布しています。配布先は、隔月に発行している「みんなの家通信」と同様に、事業所のある地域、中田は新井田地区２５０戸、東和は錦織２区１００戸に、区長さん方の協力をいただいて全戸配布しています。施設を利用しているご家族、入居の方には郵送で、その他の方には送迎時に直接手渡しで案内状をお配りしています。

また、市の担当課・支所、市内各地域包括支援センター・居宅介護支援センター、ふれあいセンター、小中学校、介護関連事業所、日ごろお世話になっているその他事業所には案内状・チラシを郵送しています。施設の掲示板にも掲示、ブログやフェイスブックに案内を載せたり、地元 FM 局の「はっと FM」で告知していただくよう依頼もしています。放送を聞いて参加しました、という方も数名いらっしゃいました。

今年度からは、「地域包括ケア情報提供書」により、市が医療・介護関係機関にメールで通知してくれるようになり、参加者の職種も数も多くなったような気がします。

ただ、まだ地域が旧小学校単位に限定されているため、もう少し広範囲に案内が行き渡るよう、また本当に必要とされるであろう、独居や高齢者世帯に確実に伝えられるようにし、より気楽に参加できるような工夫が必要だと感じています。

・運　営

毎回グループホームのホールを会場とし、テーマを変え講師の先生にお話を伺い、質疑応答や相談の後、参加者のみなさんで自由に歓談していただいています。
新井田・・転倒予防と福祉用具の選び方、排泄ケアとの上手な付き合い方（オムツ）
錦　織・・薬について（飲み方）、食について（形態）
それぞれ、介護者を支えるご家族の気になる話題、悩み事についてお話ししていただきました。
開催日時は平日の午後、送迎時間にかからないおやつの時間帯。
会場内は、正面にスクリーンを設置、テーブルと椅子を中ほどに置き、後方にお菓子、コーヒーや紅茶などを用意して、希望を取りながら提供、お替りは自由です。
玄関にはウエルカムボード、職員の生演奏でお迎えしたり、お揃いのエプロンを着用したり、テーブルを配置したり、BGM にジャズを流したりと、レトロモダンな建物を活用したシックで、和やかな雰囲気づくりに気を配りました。

毎回各テーマに沿った製品の介護ベット・靴、おむつやソフト食を展示したり、試着や体験、試食などもしていただきました。
時には、施設の行事や活動を知ってもらえるよう、利用者さんや職員の作品も展示しました。
お菓子や飲み物に地域の有名ショップの商品を使かい、話題作りをしたこともありましたが、高くつくので、その後は職員の手作りにこだわったお菓子、サーバーで入れるコーヒーを用意するようにしています。趣味がおかし作り、と言う職員が多く、毎回好評でレシピを教えてほしいとおっしゃる方もいらっしゃいました。

参加下さる方の多くは、施設を利用されている方のご家族や地域の方々です。中にはみなさんで食べて下さい、と漬物持参で来られる方もいて、一層にぎやかになります。
以前にご利用者だった方のお孫さんが、介護に興味があるというお友達を連れて参加してくださったこともありました。運営推進会議のメンバーの方（区長さん・民生委員さん等）も代わる代わる参加してくださいますし、包括やケアマネージャーさん方も毎回、市の担当者の方も顔を出してくださるようになりました。利用をためらっていた方が参加し、サービス利用につながったケースもあり、ご家族も驚いていました。

・効　果

　初回参加者の方に、これまで介護施設を見たことがない、認知症について勉強したことがない、という方が大勢いらっしゃいました。

百聞は一見に如かず、まず中を見ていただくこと、お話を聞いていただくことが何より大切。

「家族介護教室」から続けてきた「オレンジカフェ」ですが、ご本人やご家族・地域の方々に、認知症の理解と施設の役割等が確実に浸透してきたと思われます。

介護や認知症の情報、知識を提供することで、そのことへの理解が深まり、施設やそこで働く職員への信頼も、同時に高まるのではないでしょうか。

　今年度、地域に新しい動きがありました。「オレンジカフェ」に参加した方から、地域内に誰もが気楽に参加できる「集いの場」を提供したいからノウハウを教えてほしい、とコミュニティー運営協議会から要請があり、会議を重ね、実現することになりました。

　「オレンジカフェ」の目的は、認知症への理解だけでに留まらす、誰もが安心して暮らせる地域づくり、コミュニティー作りにもあると思います。

　施設で開催にも意義がありますが、地域内で大勢の人が関わって開催されることにはもっと大きな役割と意義があると思われます。　今回の事業が結果につながって大変嬉しく思い、これからも関わりお手伝いしていきたいと思います。

・課　題

　講和に３０分、施設での活動紹介や体験に３０分、相談や歓談に３０分とあらかじめ時間配分を決めて、講師の先生にお願いをしていますが、つい熱が入ってしまうのか毎回かなりの時間オーバーをしてしまいます。

また、現在は年に４回開催していますが、その他の月はテーマを決めずに、悩みや相談を気楽にできる場の提供ということに絞り、テーマに縛られず自由な語らいの場が提供できるのではないか、と開催曜日を定めて、毎月の定期開催とするを検討しています。

また、参加者に認知症ご本にが少なく、またグループホーム入居者の方々の役割がなかったということも、次回からの課題になりました。

開所から１０年、ご家族や地域の方々への恩返しと思い続けてきましたが、時代の流れにあわせ、形を変えながら、地域にとってなくてはならない場所となれるよう、「オレンジカフェ」「介護カフェ」これからも続けていきたいと思います。

オレンジカフェ開催記録

運営母体	事業所名	担当責任者
有限会社みんなの家	グループホームみんなの家	髙橋　広恵

開催日時　H27年　１１月　６日　ＰＭ14：00～16：00
活動場所　グループホーム　みんなの家　（新井田）
運営スタッフ　管理者(1）人　介護員(６）人　その他(4）人　計　11　人

参加者	地域の認知症の人	介護家族	地域	専門職	ボランティア	認知症サポーター	その他	計
	1　人	6　人	20　人	6　人	0　人	0　人	1　人	34　人

費用　参加者１人　100）円

参加費	事業所	その他	計
3,400　円	21,857　円		18,457　円

①広報
方法
・施設ご利用ご家族様に郵送、デイサービスご利用の方には送迎時にチラシを手渡しして案内
居宅、包括、市には訪問して配布
・地元FM局へ告知依頼、介護関連事業所への案内配布、地元新聞社・支局への取材依頼
効果
・第1回目の口コミもあり、前回より多くの参加者の方にお越しいただく
・チラシだけでなく、FMを拝聴し参加される方もいた
・今回、地元新聞社に取材して頂き、後日カフェの活動状況を新聞に掲載して頂く
課題
・専門職の大半がCMの方が多く、より他職種の専門職の方に参加して頂くにはどうしたらいいか
・関係各所への案内として、パターン化しない様、より興味が沸くような工夫をし、介護のイメージアップ
オレンジカフェの認知度を上げていく必要があるのではないか

②環境(雰囲気,セッテイング）
方法
・職員のオカリナ生演奏でお出迎え、開催中はBGMを流し、介護施設内でもカフェにいる様な雰囲気を作る
・職員も統一したエプロンを使用し、介護職員ではなく、カフェ店員の様な装いにする
・スタッフ協力のもと、様々な陶器、コーヒーカップを準備し、参加者の方に違いを楽しんで頂けるようする
・職員手作りお菓子やお漬物を提供し、普段のお茶飲みの様な気軽に話が出来る環境作りに努める
・ホールまでの導線に協力団体様の展示品等を起き、気軽に手に取って体験出来る様な環境を作る
効果
・前回からのリピーターの方も多く、よりよい雰囲気の中進行することが出来た
・手作りお菓子も多種準備し、カフェとしても楽しんで頂ける様、工夫し提供する
・職員も参加者の方と相席し、より話しやすい様にきっかけ作りに努める

③プログラム
内容
排泄ケアとの上手な付き合い方　日本製紙クレシア株式会社　ケアアドバイザー　羽賀　様
・リハビリパンツ等、実際に使用し吸収力の実験や、より効果的な使用方法について体験して頂く
・質疑応答、歓談、当施設の取り組み紹介（スライドショーの上映）
効果
・今まで使用した事がある方、初めての方でもなるほどなと思うような情報が多々あり、
内容的にも相談件数の上位に上げられるよう内容だった為、参加者の方の反応も非常に良かった
・方言を交えながらの分かりやすく教えて頂き、参加者の方々から適時に質問が出て賑わった
・初めて施設を訪れた方、介護施設はどういった活動をしているのか、そんな疑問を持っていた方に
スライドショーにて日々の活動、生活の様子を紹介する事によってより施設を身近に感じて頂く事が出来た
・サービス利用に抵抗があり、今まで使った事の無い方がカフェに参加することによって、専門職と
相談の場が出来、サービス利用に繋がり、ご家族の悩みを解消することが出来た
課題
・参加される方に広がりがみられるが、地域が未だに限定的であり、デイサービスのご利用者の多い、小学校校区
単位にまで広げるため、告知の方法を考える必要がある

④準備物
・ウエルカムボード・横断幕・マイク・机・椅子・花・テーブルクロス・プロジェクター・スクリーン・カメラ
・コーヒーメーカー・コップ・皿・お椀・箸・スプーン・トレー・コーヒーセット・お菓子・リンゴ・漬物・
スリッパ・エプロン

認知症カフェ　仙台市協力事業所　実施報告書「グループホームなつぎ埜」

１）　事業所の概要および地域の特徴

①　事業所の概要

株式会社　リブレ　グループホームなつぎ埜

・平成 21 年４月１日開所

・平屋　一部２階　２ユニット 18 名（１ユニット９名×２ユニット）

②地域の特徴

グループホームなつぎ埜は若林区今泉小在家東地域（六郷小学校区）にある。設立当初は、同じ若林区種次（東六郷小学校区）にあったが、平成 23 年３月 11 日に東日本大震災の津波により全壊。あすと長町でのグループホーム型仮設住宅で避難生活を送ったあと、平成 25 年３月 16 日に津波被害の可能性の低い東部道路の西側に新築し移転した。六郷中学校区に位置しており、東・北方面には自然の広がる田園地域と西・南方面には住宅地域が広がっている。おいしい米が自慢であるが、東日本大震災により、休耕や縮小化が見られている。今泉地域は、７つの班に分かれており、当事業所は第７班（Ａ とＢ地区あり）のＢ地区に属している。平成 25 年現在、Ｂ地区は１０８世帯あり、昔から農業を営んでいる家が多いことから高齢者との同居率も高く、高齢者のいる世帯は９８世帯となっている。但し、日中は独居の人が多い。今泉地域において、独居の人限定で今泉集会所で集まりを持っているが、Ｂ地区は独居ではない、今泉集会所に行くには遠いため参加できないなどの理由で、ほとんどの人が家で過ごすことが多い。地域として高齢者にとって楽しみのもてる居場所がないのが課題である。当地域は、以前ホームがあった種次とは東部道路を挟んで東と西側になっており、地域が全く異なるため日常生活で行き来はほとんどなく、全く新天地でのスタートとなった。

２）　オレンジカフェの取り組み

グループホームなつぎ埜では新天地でのコミュニティづくりの一環として平成 25 年８月より月に１回、毎月第３週の木曜日の１０時半～１２時まで、グループホームなつぎ埜の２階地域交流室で実施してきた。オレンジカフェ「いっぷく」という名称で開催。平成２８年２月現在毎月実施している。

①カフェの準備

・開催の周知と目的の共有

認知症グループホームは、介護保険の中で地域密着型サービスに位置づけられており、２ヶ月に１回運営推進会議が義務づけられている（地域包括支援センター、地域の人や利用者・家族などが参加）。第１回目の運営推進会議を平成 25 年５月に開催。新天地でどうグループホームの入居者の暮らしをつくっていったらいいか、地域の役立つ拠点地の役割を果たすためにグ

第１回認知症サポーター養成講座

ループホームは何ができるか、委員の皆さんに相談した。その会議ででた意見として、グループホームがどんなところかわからない、敷居が高い、高齢者の多い地域で集まる場所がない等の課題が提示された。その手立てとして、近くに集まれる場所「オレンジカフェ」を作ること、区長や民生委員、地域包括支援センターも応援団になって居場所づくりをすることなど合意を得ることができた。その際、認知症カフェについての説明を行っている。

②チラシの作成

地域の方々にわかりやすい簡潔な内容で、興味を引くカラー印刷など工夫してチラシを作成した。カフェの目的や内容については、認知症という名称が表に出ると参加をためらう人もいることから、チラシからは外し、多くの人が気軽に参加できるようにした。地域での回覧（１３部）に一緒に回せるよう毎月月末までに準備して、区長に依頼した。また、地域の掲示板への貼付を行うとともに、事業所の駐車場に外へ向けての大きめの掲示板を作り、お知らせした。

③場所

震災後の再建にあたり、地域の特性を踏まえ２階に地域交流室を造ったことから、その場所を活かすことにした。但し２階だが、階段利用であるため、参加は一部介助の人までに限られている。

参加者は徒歩、区長の車での乗り合わせ、なつぎ埜で迎え可能な３名程度の人など自力での参加か、乗り合わせで参加する方がほとんどであった

３）　広報

・チラシは毎月小在家東地区の回覧７班（１０８世帯）に区長を通して周知した。

・近所へのポスティングと電話による声がけ

・民生委員から気になる方への配布や声がけ

・包括支援センターへの配布

・サポーター養成講座の後にカフェの開催を案内

第１回目は、民生委員が参加しやすい第３木曜日として、14:00 から実施した。内容は講話として「認知症サポーター養成講座」を行った。運営推進委員の民生委員がほかの民生委員にも声がけし４名参加、区長、職員の親など 10 名が参加。しかし一般住民というよりも世話人の方の方が多く、地域に住む職員の家族にも声がけして参加するなど、スタートをきったばかりでこれからという感想をもった。開催後、「利用しやすくなるためにどうしたらいいか」反省会をもった。曜日として、月・水・金はデイサービスなどに行く人が多いので火か木曜日がよい。午後からの実施だと出かけるのが面倒になるので午前中がよいなどの意見が出され、次回からは実施時間を 10 時半から実施することにした。また、参加者に世話人としてボランティア希望者を募ったところ、３名の方の応募をいただいた。2 回目以降、地域の人は 12～20 名程の参加になっている。入居者（認知症の人）も参加しているが、場所が 30 名ほどで一杯になるため、地域の人の参加人数に合わせて、入居者の参加を調整している。

４）　運営

・運営費として、参加費はお茶代として１００円を頂いている。会場の入口に箱を設置し、窓口を特に置かず自由としている。

・会場の設営（テーブル配置、環境等）

できるだけ少人数での会話が弾むように６人程度のグループ配置を行った。テーブルには、地域の人だけが偏らないよう、入居者（認知症の人）や世話人が混合するようにした。

最初にミニ講話や物づくりのお楽しみなど 15 分程度の活動を準備しているため、机の上には利用者の作ったゴミ箱を置いた。色々な飲み物（お茶・コーヒー・昆布茶・梅茶など）やお菓子・漬物などは部屋の入口近くに設置し、世話人やスタッフが参加者の意向を聞いて配った。

第１回目に、区長宅よりカラオケセットを準備していただいたところ、みんなが楽しく歌ったり、元気体操が飛び出したり、とてもいい雰囲気だったことから、毎回区長の協力により毎回カラオケセットを準備してセッティングし、終了後は持ち帰っている。

・毎回、最初の 15 分ほどのミニレクチャーはスタッフや地域包括支援センター等が担当して行っている。終了後は、区長の持ち前のコーディネート力を活かし、カラオケや脳トレのクイズなど楽しく活動している。地域の人のことを良く知っている区長であることから、その時の雰囲気や流れに合わせて心地よい時間を作り出している。全員ボランティアであり、料金は発生していない。

平成 25 年８月から行った主な内容は次の通りである。

・認知症の理解と予防　・フットケア・クリスマスツリー制作・手作りパズルと福笑い・手作り入浴剤・転倒予防の足の爪の切り方・認知症介護家族の話と交流・フラワーアレンジメント・脳トレ・感染予防（風邪など）・食中毒予防・誤嚥のない食べ物の工夫・コンサート（仙台フィルハーモニー）

５）　行政との連携（地域包括支援センター含）

地域包括支援センターは２ヶ月に１回実施のグループホームの運営推進会議に出席していることから、開催に当たっての工夫やアイデアおよび実施しての感想と改善など定期的に話題提供し意見交換ができていることは、運営に大変役立っている。区長や民生委員からは、地域の資源（物・人）についての情報や資源を活かした工夫など助言を頂いている。一番最初に「認知症カフェ」を行う目的や今後の方向性について話を丁寧にしたことで、地域を良くしていきたいという熱意と合致し、大きな応援団になってくれている。

カフェ開催時には、会場の設営、カフェ時の手伝い（飲み物の給士、個別相談援助）後片付

けなどの協力を頂いている。このオレンジカフェをきっかけに地域包括支援センターとの連携が深まり、地域の資源マップづくり（六郷地域包括主催）や認知症の人の徘徊時の探索ネットワークづくりなど活動の広がりが見られている。

６）　運営推進会議との連携

２ヶ月に１回の運営推進会議の果たす役割はとても大きい。理由として住みよい地域づくりを協働で行う意思や方向性の統一を図る機会となっている、地域のニーズのアセスメントと具体的なアクションプランをつくることができる、目的達成のための役割の分担ができるなど重要な位置づけになっている。運営推進会議を義務として単に行うのではなく、誰にとっても住みたいコミュニティづくりを行うためのツールとして活かすかは、事業所にとっても地域にとっても大きな意味をもつ。

７）　地域との連携

広報や地域の世話人の方の呼びかけで、近所の人の参加や、地域の認知症の人やほかの事業所の利用者や色々な団体の参加など参加者が増えている。また、入居者以外の男性の参加がなく少し寂しさがあったが、１年過ぎてようやく男性の参加が見られるようになった。

一人で歩いて来れる人が限られており、今後継続していく上での課題が残されている。

８）　認知症の人の役割

毎回、カフェ開催時にはグループホームなつぎ埜の入居者が６～７名程参加をしている。紙を折って作る使い捨てゴミ箱、漬物作り、お菓子や果物の買い物や準備、配膳などの事前準備をしている。

カフェ開催時には、漬物やお菓子を勧めたり、ものづくりの時の手助けなど活き活きと過ごしている。特に自前の漬物を参加者に褒められるととても嬉しそうである。認知症の人も地域の人も場所に馴染み、互助の関係で過ごしている姿は、皆んな一体となって自然に溶け合っている。地域の人も認知症の人の仕事を取り上げるのではなく、見守りながらできないところだけ手助けする風土ができつつある。地域の人が一緒に過ごす中で、認知症の人の力を改めて見直したという感想もあった。

９）　オレンジカフェ開催の効果

高齢になるとどうしても社会参加が少なくなり、孤立化になりがちである。参加することで家にこもりがちだった人が外に出て、交流の機会を持つようになり明るい表情に変わっている。特に、認知症の人や家族は、外に出たり、ほかの人と触れ合う機会が少なくなる。認知症カフェに通い、認知症の人と過ごす中で、自然に認知症の人の力の発見や接し方を身をも

って学ぶことができている。具体的な介護方法や認知症の人への接し方を学びたいと思っても、どこに聞きに行けばいいのか、どう聞いたらわからない不安を抱えたままのひとも、「認知症カフェ」の機会と場があることで、気軽に話ができる利点がある。実際に介護した経験のある人の話を真剣に聞いていた姿が印象的だった。また、「認知症になった人は何もできない人」という偏見や将来認知症になったらどうしたらいいだろうかという不安を抱えている人も多い。しかし、参加することで、認知症の人は特に暴言暴力やウロウロするわけではなく、色々なことができたり、上手に歌を歌ったりしている姿をみて認知症についての理解を深め、終了後はとても笑顔であったかい気持ちで帰途につく方も多くいる。認知症カフェに通いながら、地域に住む認知症の人への接し方も最初と少しずつ変化していった人もいた。

地域に住みながらもほとんど交流が途絶えていた人同士の人が、「認知症カフェ」によって改めて顔の見える関係を紡ぎ直し、開始時間３０分前に来て、２人の楽しい時間を過ごす人もいた。この認知症カフェは、関係性を作っていける場でもある。

第４回フットケア

１０）今後の課題

「認知症カフェ」に参加するためには、原則自力で来れることである。しかし、高齢のため、どうしても外出が億劫になったり、１０分以上かかるところへの歩行は難しかったり、会場までの安全性の高い足の確保は大変難しい。世話人や事業所が車で送り迎えをする方法があるが、事故の場合どうするかという問題がある。区長始め世話人には万一のために一人ひとりボランティア保険をかけているが、どこまで対応したらいいのか難しい面がある。また、会場が事業所の２階になっており、一部介助で階段の上り下りが可能な人は大丈夫だが、それ以上の人の参加は難しい。部屋が３０名限度になっており、参加希望者が増えた場合の会場の検討が必要。認知症ケアを理解したボランティアの育成などが挙げられる。

11）考察

認知症カフェを開設するにあたり、運営者の理念とコンセプトを明確にしていく作業を丁寧に進めていくことが大切である。また、運営する上で、場所や交通手段、予算、人員の確保など様々な課題はあるが、「認知症カフェ」が居場所づくりの大きな役割があることから、課題を地域の人と共有し、共に前向きに取り組んでいきたいと考える。

オレンジカフェ

運営母体（株式会社リブレ） 事業所名（グループホームなつぎ埜） 担当責任者 蓬田昌倫

H27年8月20日	活動場所　なつぎ埜2階	運営スタッフ・管理者（　1名）介護員（　3名）

参加者　本人（12人）家族（0人）住民（5人）専門職（1人）ボランティア（3人）その他（0人）

費用　参加費　１人（　100円）　事業所（　1300円）　その他（　0円）　計　400円

①運営内容

・不二家味留喜(ふじやみるきー)さんによる、ものまねショー
・おなかすっきり体操
・区長さんによる、頭の体操、カラオケ
・お茶飲みながら談笑

②実施として

（効果）

・普段なかなか見る機会の少ないものまねを見れて楽しめたのではないかと思う
・日頃近所に住んでいても、なかなか顔を合わせる機会が少ないが、ここでは顔を合わせることができる
・オレンジカフェが、外へ出るきっかけの1つになっていると思う

（議題）

・時間が余ってしまい、区長さんに急遽時間を繋いでもらった
・利用者様と地域の方との交流がまだまだ足りない
・もっと皆が参加できることを実施していく
・職員のからも発表していくように喚起していく

（次回に生かすこと）

・地域包括支援センターや民生委員と協力し、地域の方にとってオレンジカフェがどのように開催していったらいいのか把握していく
・地域包括支援センターや民生委員、区長に協力しもらい、オレンジカフェを広めてもらう
・時間に余裕を持って、送迎に行く
・予め利用者には、バラバラにテーブルに座ってもらい、そこに地域の方が座る形を取り、交流を図ってもらえるよう促していく

（その他）

まとめ

本事業で、認知症カフェに取り組んだ全事業所から認知症の人や介護者、参加者にとって大きな効果があったことが報告されている。
介護家族からは、具体的な介護方法や自分の介護について悩みを抱えていたが、カフェに参加することにより、介護の辛さを吐露したり、支援してもらうことで、安心感につながったという意見もあり、同じ経験をしている人同士だからこそ得られる共感やアドバイスをえられる場があることの大切さが見えてきた。また、専門職なども参加することで、相談ケースを地域包括支援センターや認知症専門相談窓口につなぐなど、希望を持てる介護の道筋が作れる可能性がある。
また、地域の人が認知症カフェに参加することで、認知症の人の力を改めて認識できたことも大きな成果である。認知症になっても安心して住み続けられるためには、互いに理解し合い、顔の見えるコミュニティづくりが必要である。認知症カフェは、心を通わす機会や場になっていることが、取り組みを通して明らかになったものである。
しかし、認知症カフェを今後も継続していくためにはいくつかの課題もある。
①認知症カフェと認知症の名称がつくと抵抗感があり参加しにくい　②会場として公的施設（市民センターなど）を使うと、その他の地域の人にとって敷居が高いと感じることがある　③自力でカフェまでいくことができない人の送迎と事故の際の対応　④参加時の事故の対応やカフェを運営していく上での人員の確保　⑤予算の確保　⑥協力者の人材育成などが挙げられる。
認知症カフェを設立・運営していくためには様々な課題はあるが、今後、認知症カフェが認知症の人や家族を支援していくためのツールとして大きな役割が期待できる。
地域の資源（行政や地域包括支援センター、地域の役員や民生委員、医療や介護事業所関係、ボランティア、認知症サポーターなど）の掘り起こしを行い、連携の輪を広げることで、様々な形態のカフェが増えていくと考えられる。馴染みの生活圏に色々なカフェがあると、参加したいカフェを選択することができ、満足度の高い過ごし方ができていく。また、認知症カフェが今後さらに発展していくために、運営する人たちが互いに情報交換する「認知症カフェ」の連絡会なども大切な要素となっていく。馴染みの地域で暮らし続けるために、「無理をせず今できるところから１歩ずつ」応援団の輪を広げながら、みんなの安心と笑顔が増えていく認知症カフェを進めていきたいものである。
「認知症になっても大丈夫」共に生きられる地域になるために。